

本稿は、『図書新聞』(3439)号に掲載された、中澤豊『哲学者マクルーハン—知の抗争史としてのメディア論』(講談社選書メチエ, 2019)への書評の草稿です。完成稿と微妙に内容・表現が異なる場合があります。ご著書等で引用される際はこちらのデータではなく、当該の記事を入手の上、そちらを参照して下さい。

## 対話としてのマクルーハン理論

梅田 拓也

マーシャル・マクルーハンの本は必ず読んでおくべき古典だが、真に受けるとよろしくないものであることは、メディア研究者の中ではもはや常識と言ってよいだろう。彼は「メディアはメッセージである」をはじめとした警句によって、メディアを論じるためのさまざまな論点を提起した。それらは新聞やテレビのようないわゆる「マスメディア」だけではなく、広い意味での「媒体」を対象とするメディア研究の成立に寄与した。そして研究者だけではなく、企業経営者や芸術家たちにも広く読まれ、何度も講演会やマスメディアに出演し、半ば社会現象にまでなった。しかし実際に彼の文章を読んでもみると、一見関係のないように見える物事が羅列され、「メディアはマッサージである」のような含みのある言葉遣いや駄洒落にあふれ、挙句の果てには確な根拠も示されないまま主張が展開されていることに気づく。だからメディア研究者は、マクルーハンから多くの示唆を受けながらも、彼を批判し続けてきた。

しかし本書『哲学者マクルーハン』の筆者は、このような一見いいかげんにも見えるマクルーハンの記述戦略に彼の「哲学」を読み取る。マクルーハンは初期から、ソフィストとプラトンの対立や、カトリックとプロテスタントの対立、南北戦争期における南部と北部の対立、そして口誦文化と文字文化の対立について論じてきた。彼はこれらの対立の背後に多様性や無駄を重視する思考と合理主義的な思考の対立を読み取り、一貫して前者を称揚し後者を批判する。筆者はこのことをふまえ、マクルーハンが用いる「レトリック」や「隠喩」がこのような合理主義批判に根差していると繰り返す。つまり一見学問的には思えない彼の方法論は、本を読むと正しい結論を知りたがる合理主義的な思考に捕らわれた人々を挑発し、想像力を働かせ多様で豊かな思考へと導くためのものなのである。言いかえれば、彼の本を読んでこれは論理的ではないと喚く人こそ、彼が批判した思考のあり方にとらわれていると言える。ただし、マクルーハンのテキストや彼の学説史研究に親しんだ私のような人間にとって、実はこのような解釈そのものは目新しいものではなかった。筆者も自身の解釈が、日本で初めてマクルーハンを紹介した竹村健一理解に基づいていると述べている。

私の目を引いたのは、著者がマクルーハンの理論を彼が生きる中で出会った人々や事柄との対話として描き出していることである。著者は本書で「なるべくマクルーハンが残した警句(アフォリズム)には立ち入らず、マクルーハンとその周辺に現れたエピソードをヒントに、マクルーハンの『方法』の理解」に迫ると述べている(19頁)。この宣言通り、本書ではマクルーハンのテキストを精読する作業はほとんど行われず、代わりに、マクルーハンが実際に出会い議論を交わした人々の考えや、彼が若い頃から読み続けていたテキストが断章的に取り上げられ、そこから彼の議論に注釈がつけられる。読者はマクルーハンと古今の著述家たちとの語らいを読み進める中で、新たな理解の入口へと誘われる。

本書で示されるマクルーハンと著述家たちの対話の一端を覗いてみよう。①まずマクルーハンと同時期にトロント大学でメディアの研究を進めていた、いわゆる「トロント学派」の研究者たち（ウォルター・オング、ハロルド・イニス、エリック・ハヴロックら）との関係はいうまでもなく扱われる。②また筆者はマクルーハンが文学研究からキャリアを出発させたことに注目し、彼に影響を与えた「ニュー・クリティシズム」と呼ばれる批評理論の中心人物（アイヴァー・リチャーズ、T・S・エリオット、ノースロップ・フライら）や、マクルーハン自身が初期から好んで論じていた文学者（トマス・ナッシュ、G・K・チェスタトン、エドガー・アラン・ポー、ジェイムズ・ジョイスら）との関係にも言及する。③さらに筆者は既往研究でもほとんど扱われてこなかった意外な人物との関係も炙り出している。例えば、言語学の祖の一人であるエドワード・サピアや、日本でも人気のある経営学者ピーター・ドラッカーらとの思想的関係は興味深い。このように、マクルーハンは20世紀半ばの北米大陸に生き、様々な人々や数々のテキストと対話を進める中で、自らの議論を作り上げていったのだ。

著者が、マクルーハンの実子であるエリック・マクルーハンに「マーシャルは何て呼ばれるのが好きだったか」と尋ねたところ、彼は即座に「英語教師 (English Teacher)」と答えたそうだ (22 頁)。これまで「メディア論者」、「予言者」、「導師」、「守護聖人」といった賛否両論のさまざまな評価を受ける中で、一人の英文学の教師としてのマクルーハンの姿は後景に退いていたかもしれない。しかしこれから彼の著作を読む者は、テキストに真摯に向き合う英文学者であり、そこから多様な思考を巡らせた哲学者であった彼の姿を思い出さなければならない。マクルーハンがどのような時代に生き、何を読み、誰と語りあったのかを描き出す本書は、そのための強力な地図となるだろう。